

情報技術の進歩がもたらすインパクト

理事・副学長 畑中 保丸

2016年のスタートにあたって、ほとんどの人々が情報技術の進歩の恩恵を受けており、むしろそれを当然のこととして利用する時代となってきました。このような時代に対応すべく、富山大学の総合情報基盤センターにおいても新システムへの移行を進め、今回のセンター広報では「新システムの紹介」に関する特集が組まれています。

むろん、専門的な内容はそちらにお譲りすることとし、情報技術のエンドユーザーである門外漢からは、自身の専門領域から見えてくる、技術進歩のインパクトを少しご紹介したいと思います。

まず、昨年の夏に富山で開催された“PCカンファレンス”での開会の挨拶で、まったくのエンドユーザーからとして述べた内容を、以下に引用して紹介します。

* 私の専門は薬学に関連したケミストリーで、メールやインターネットはもとより、構造型や立体モデルの構築、相互作用のシミュレーションやドラッグデザインなど、もはやコンピュータなしの日常は考えられない領域です。

つい先日、アメリカ化学会から『インターネットはどのようにケミストリーを変えたか』という特集記事が *Chemical & Engineering News* 8月10/17日号(2015)で報告され、“*Chemistry on the Internet: The good, the bad, and the ugly*” という観点から、種々の興味ある切り口が紹介されています。

その中で特に印象に残ったのは「学術論文を閲覧するのに、主としてコンピュータを用いる割合は89%」という調査結果で、まさに時代変化のスピードを実感させるレポートでした。タブレット端末とスマートフォンの利用を加えると、実に99%となります。

図書館での論文閲覧に始まり、ミスタイプの修正など、一つの論文を仕上げるまでに多くの時間を費やしていた一昔前を、少し懐かしく思い出し

ておりました。*

加えて同レポートにあるアンケート結果は、このような現状を次のように切り取っています。“How often do respondents go to the library?” “It’s been so long, I can’t remember.” “63%.” これだけでも十分なインパクトですが、“A few times a year.” “A few times a semester.” を加えると91%となります。

ほぼ毎週のように図書館に通い、新着学術誌のチェックで新しい動向にワクワクする一方で、今や閉架庫行き立派に製本された革張りの学術誌に巡り合い、それを開いて感動すら覚えていた時代が夢のようにも思えてきます。

このような背景には、当然のことながら情報技術の利便性が質的に進歩したことが考えられ、“83% of responders say e-mail is the most useful method of communication.”には、やはり I agree! でしょう。

“Responders use the internet to keep tabs on the following (they could select more than one answer): 74% Research topics, 59% Specific journals, 47% Specific news sites.”などは、これまで主に図書館で行っていた作業が、インターネット経由に置き代わった結果としても、“39% Colleagues, 24% Competitors, 19% Funding agencies,” さらには、“17% Yourself”などは、まさに時代の進歩がもたらした産物と言えましょう。

私自身もこのような情報技術の進歩を同じように甘受しており、そのインパクトが恩恵か否かをコメントできる立場にはありませんが、今後も加速度的に飛躍するとされている情報技術の進歩にあつて、内容的に時代遅れとなってもインパクトがあった革張りの書籍の感触を大事にしていきたいと思います。本年もよろしくお祈りします。